

みやざわけんじ うつ えびさじょう
宮沢賢治の写し絵劇場

注文の多い料理店

第一部では、宮沢賢治の生立ちや、人となりにスポットをあて、「祭りの晩」「ひのきとひなげし」なども紹介されます。

第二部では、賢治の代表作「注文の多い料理店」を上演します。人気画家寺門孝之氏の描き下ろしの約200枚の絵が、会場中をダイナミックに駆け巡ります。暗闇から極彩色のガラス絵が色鮮やかに写し出される結城座ならではの幻想的な世界を、ぜひお楽しみください。

原作/作曲 宮沢 賢治 / 寺嶋 陸也
脚本 山元 清多
演出 加藤 直 (原案 山元 清多)
写し絵原画 寺門 孝之
公演時間 全体 約90分 (休憩込み)

- 第一部「賢さんのトランク」約35分
- 第二部「注文の多い料理店」約35分



光と影で描く 妖しの「写し絵」と 人形たちの 饗宴のはじまり

●児童生徒参加型の共演スタイル

このたびの本公演に先だって、児童生徒の皆さんと一緒に、宮沢賢治の作品への理解を深めつつ、本舞台中に映し出す「江戸写し絵」の種板作成と、劇中歌「ボランの広場」の合唱・合奏という2つのワークショップを先生方のご協力のもと実施しました。

見どころの一つは、第二部の冒頭

子どもたちの自由な発想で書き出した「賢治ワールド」の「種板」を、次々とスクリーンに写し出すのは、結城座の座員たち。それを背景に、この日のために練習を重ねた子どもたちの歌声や演奏が響き渡ります。国と都の文化財という「結城座」の持つ2つの江戸の伝統芸能の技法と、子どもたちのコラボレーション。

ただ鑑賞するだけではない、より積極的な関わりの中で

「ともに創る舞台」をお楽しみください。

そして現代劇でありながら、その奥底に日本の伝統芸能の技を

感じて頂けたら幸いです。



伝統から尖鋭へ 古典と新作との両輪で動く結城座

結城座の歴史は、寛永12年(1635年)、江戸幕府公認のあやつり人形の一座として興行を認められたところから始まります。

それから今日まで、383年の伝統を守りながらも、本公演「宮沢賢治の写し絵劇場」などの新作も上演し、世界的な活動を行っています。

江戸時代の字ピラ(チラシ)

タイトルに、「御操 結城孫三郎」とあわせて、幕府公認であることを示す「御免」の文字があります。

また当時の観劇料が、

「御老人前 銀老朱(現在の約8,000円相当)」であることがわかります。

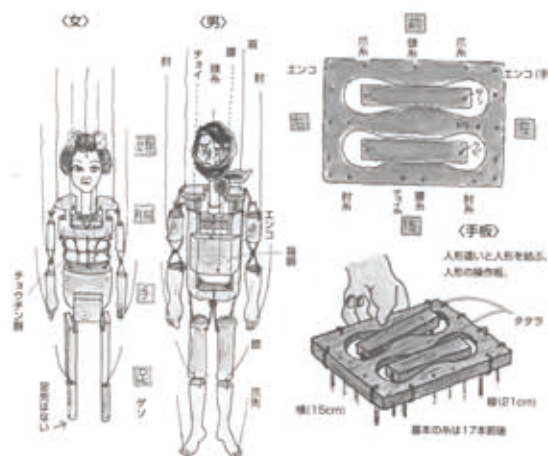


「江戸系あやつり人形」の構造

人形の大きさは、およそ60センチで、頭、胴、手、足の四つの部分で構成されています。

人形を動かすあやつり糸は、通常で17本。また多いものでは40本から50本ほどの糸を用いることもあります。

それを結城座特有の「手板」で操作します。(このスタイルは、世界的にも大変珍しく「結城式」、もしくは「日本式手板」といわれています。)



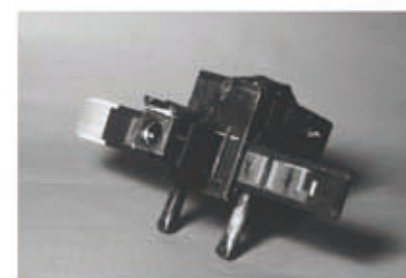
「江戸写し絵」とは

「江戸写し絵」は、383年の歴史をもつ「結城座」が伝える、もう一つの伝統芸能です。

『風呂』と呼ばれる箱型の幻燈機を、同時に何台も使い、スクリーンで絵を合成するものです。

いくつかの絵の描かれた枠付きガラス(種板)のスライドをはめこみ、それをずらすことで絵を変えていきます。

『風呂』をもった複数の遣い手が、スクリーンの背後から前後左右に動きまわり、それによって映像は大きくなったり、瞬時に遠ざかったりします。



▲写し絵の機材(風呂)と種板